

自然と文化科 活動記録

日時	2025年1月17日 10:00~15:00	担当者
場所	福島区民センター 午前：公開講演会 1階ホール 午後：各委員会、全体会議、班会議、運営委員会等	文・写真： 寺尾 修
備考	参加人数 1班20名 2班21名 3班20名 4班19名 外部11名 合計91名	

公開講演会の概要は以下のとおりである。

1. 講演のテーマ：「卑弥呼と纏向王権 -邪馬台国論のいま- 」
2. 講演者名：纏向学研究センター所長 寺沢 薫先生
3. 講演者略歴：東京都葛飾区生まれ、同志社大学文学部文化学科卒業（文化史学専攻）の後、奈良県立橿原考古学研究所を経て現在に至る。



4. 講演要旨：

- ・考古学を軸に文献との整合性をも考慮しつつ、ヤマト王権の誕生を探った。

<結論>

- (a) 遺跡は「ヤマト王権」最初の大王都である。

3世紀初めに広大な地域に出現し、その中に宮殿風建造物（第一次大王宮）も発掘された。

<根拠>・農機具の発掘は少なく、スキ等の建築器材が主に発掘されている。

→弥生時代からの発展とは考え辛く、突如出現したと推察される。

- ・各地の土器が出土した全体の15~30%になる。

→列島の人々と物産の集積が考えられ、**社会、経済の中心地**と推察される。

- ・石塚、矢塚、ホケノ山古墳は初期前方後円墳と推察され、前方の小さい「纏向型」から前方部の大きい定形型となり全国拡散したと考えられる。（キビ国王墓が原型かも）

また、ホケノ山古墳からは近畿で最初の中国の鏡が発掘された。

（九州では弥生期に大量に出ている。）

→王宮の建造も考慮すれば**政治の中心地**になったと推察される。

- (b) 2世紀後半の東アジア情勢及び国内を鑑みて纏向の国家は、北部九州にあったイト国を軸にした各地区豪族合同（会盟）国家であり、その地の邪馬台国の国王：卑弥呼を倭国王とした。

<根拠>・後漢王朝の衰微→三国時代：高句麗等の反乱による前漢皇帝陵の焼討ち（140年）に続き、黄巾の乱（184年）、董卓の洛陽占拠（189年）、袁紹挙兵と落葉焼亡（190年）さらに同年公孫度の遼東半島での独立・東夷等を経て、『魏書』の東夷伝倭と韓に最も影響をおよぼした公孫康の**帯方郡設置**（204年）。

→韓と倭が帯方郡に属する事になったとされる。

- ・弥生期に北九州にイト（伊都国）とナ（奴）国があり、イト（伊都国）が倭の太守として存在し、北陸を含む中部以西の倭国を支配していたと考えられるが、2世紀末の倭国の情勢は、イト国以外の各地勢力がアイデンティティを主張し出し、（各地の個性的銅鐸・丘墓の存在から推察される。）さらに大乱の様相となった。

（『魏書』の倭人伝）

→**帯方郡**への対応を考慮して、纏向の各地区豪族合同（会盟）国家を成立させ、その時点でその地の国王「卑弥呼」を倭国王とした。

【所感】北九州からの国家移転という興味深い講演でしたが、短時間での理解はやや困難でした。